オーガスチンのまなざし

主教 小林 尚明

『立教大学卒業式』

3月23日（木）午前10時から卒業礼拝の奨励、12時から理学部・社会学部の卒業式に祝辞を述べるために池袋にある立教大学へ行ってきました。　何を話そうかと考えて、送っていただいた大学案内にありました立教大学の使命について、卒業式の前に再確認してほしいとお話しました。

「立教大学の使命は、単に競争社会で自らの能力を誇るような人間ではなく、人間の一生において欠くことのできない大切なものとは何かを探求し、すべての生命が尊ばれる社会の実現のために奉仕する人を育てること」と、さすがキリスト教に基づく学校です。そして、このコロナ禍の中で、私が一番学びました「天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない（マルコ13章31節）」を紹介しながら、安心の根拠を置くことのできるものとそうでないものを見極める目を持って卒業してほしい、とお話しました。

また、今年2月、NHKの番組で見たオーストラリアにワーキング・ホリデーで滞在する日本の青年たちのことや同国での私の息子のことも例に挙げ、いろんなことに挑戦してください、とお話しました。その時に、もし明日のことが不安になったら、「明日のことまで思い悩む（マタイ6章）」必要のない事とその根拠となる空の鳥、野の花を見て神様のご配慮を感じ、力強く進んでほしいと語ってきました。

神戸教区から出向中の浪花朋久司祭も他のチャプレンたちと共に張り切っていて、安心しました。

（神戸教区主教）

ディサイプルシップ①

司祭　ペテロ　中原康貴

人事異動で転勤すると、しばしば赴任先の信徒の方からこう言われることがあります。

「中原司祭の言っていることは、以前の牧師から教わったことと違います」

昨年、フランスの著名な旧約聖書学者が著した本が、『ヤバい神・不都合な記事による旧約聖書入門』として翻訳出版されました。同書を購入する前に、訳者と若手聖書学者が対談している動画を見たのですが、そこで若手聖書学者が、私が学生時代に教わった旧約聖書学のある有名な説を「今では血液型による性格判断程度のもの」と言ったことに衝撃を受けました。専門と思っている分野以外にも目を向けることを心がけていたつもりでしたが、全く知りませんでした。急いで同書をはじめ、近年の聖書学の書籍を購入し、アップデートしています。

よく「神学とは神を言葉化する作業である」と表現されます。イエス様やその福音は変わりませんが、それらに触れる私たちは置かれた状況によって常に変化しています。ですから、その変化に伴って私たちの受け取り方や表現の仕方も変えていく必要があります。

英国で注目されている聖公会の聖書学者ポーラ・グッダーは、次のように述べています。「弟子を意味するギリシャ語やラテン語には『学ぶ者』という意味があります。弟子たちがイエスに従ったのも学ぶためです。弟子であり続けるためにはイエスから学び続ける必要があります。洗礼を受けたばかりの人が信仰について学ぶことはとても大切ですが、学ぶことは洗礼を受けたばかりの人だけのものではなく、イエスの弟子であろうとする、すべての人のものです。弟子にとって学ぶことは、息をすることと同じなのです。」

近年、世界の聖公会で「ディサイプルシップdiscipleship」（弟子化、弟子訓練、弟子であること）の重要性が注目されています。今後も神学塾から「ディサイプルシップ」をテーマにした記事をいくつかお届けします。イエス様の弟子であり続ける喜びとそのための学びの大切さを受け取って頂ければと願っています。

（神学塾運営委員長）

中原司祭が翻訳した、ジョン・リーズ著『自給している聖職者たち・特任聖職実践ガイド』（かんよう出版）が出版されました。渋谷聖公会聖ミカエル教会に問い合わせると1,500円（税抜、送料込）で購入することができます。世界の多様な聖職者の在り方を知ることを通して、聖公会やその宣教の幅広さを学ぶことができるでしょう。